

東アジアにおける昔話モチーフの分布

斧原 孝守

はじめに

日本の昔話を考えるにあたって、東アジアにおける昔話モチーフの分布を知ることにはどのような意味があるのか。ここでは具体的に三つの昔話を取り上げ、モチーフの分布という、古くて新しい問題について考えてみることにしたい。

ここで取り上げる昔話のタイプ（そして、その中に含まれるモチーフ）は、「稲羽の素兎（水上に並べさせた動物の数をかぞえるふりをして向こう岸に渡る）」、「蛇罨入り（「苧環」夜来者の衣に糸を通した針を付け、その正体を知る）」、「桃太郎（「黍団子」次々と現れる援助者に食物を与えてお供につける）」である。

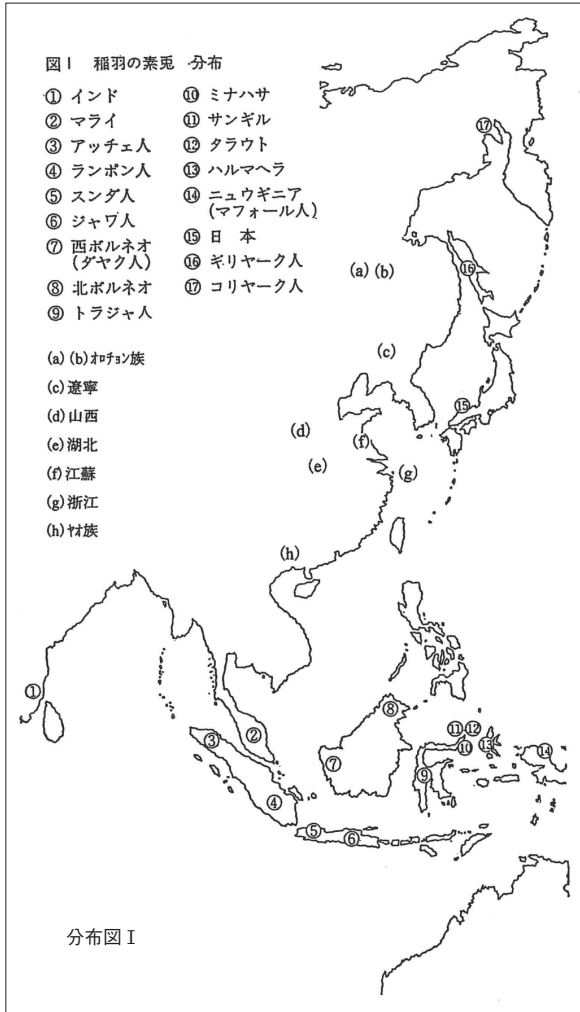
数ある昔話モチーフの中で特にこの三つのモチーフを取り上げたのは、これらのモチーフが特有の分布を示し、その分布像がそれぞれの昔話を解明する上で重要な意味をもっていると思うからである。

一 「稲羽の素兎」の分布

出雲神話の「稲羽の素兎」は、日本最古の動物昔話である。この昔話は、泳ぐことのできない動物（兎）が水棲動物（ワニ）を水面に並ばせ、彼らの数をかぞえるふりをして対岸に渡るというもので、興味の核となるモチーフは「数をかぞえようと騙して並ばせ、水を渡る」である。この話の構想は単純で、核となるモチーフが一つのタイプを構成している。

この物語の分布は興味深い。『古事記』の「稲羽の素兎」が最古の事例であるが、日本ではすでにこの類型は消滅し、日本列島の南北にそれぞれ大きな分布圏がある。^①「稲羽の素兎」の話がまとまった形で東南アジアに広く分布していることは早くから知られており、この物語を東南アジア系とみなす有力な論拠となっていた。しかし東北アジアにもそれなりに類話が流布している以上、この話を簡単に東南アジア系の物語とみなすわけにはいかない。

ところで精力的に神話モチーフの分布研究を進めているロシアのユーリ・ベリョースキンが、このモチーフの世界的な分布を示している。しかし齋藤君子によれば、ベリョースキンが類話と認定するアフリカの三話のうち二話が、単に鎖状に繋がった動物を伝って危機を脱するだけの話だという。^②齋藤が批判するように、ここまで枠を広げてしまえば、少なくとも「稲羽の素兎」の分布研究は成り立たなくなる。「稲羽の素兎」では数を



かぞえると騙して並べた水棲動物の上を渡るといふ趣向が決定的に重要で、比較はこの水準で行わなければならない。物語の分布を読むためには、モチーフの定義が何より重要である。

この昔話の分布を考える上で忘れてはならないことは、東北アジアと東南アジアを地理的につなぐ中国大陸にも、南北にわたって微弱ながら類話が点在することである。東アジア類話群といつてもよいであろう。分布図 I にしたがって、中国大陸の

北から順に類話の流布地と対立する動物名を挙げてみよう。

(a) 黒竜江省? (オロチヨン族) 狐とナマス。⁴⁾

(b) 黒竜江省 大興安嶺阿里河(オロチヨン族) 連鎖譚。イタチとナマス。⁵⁾

(c) 遼寧省法庫県(漢族) 兎とスツポン。最後のスツポンが兎の尾を噛み切る。⁶⁾

(d) 山西省大寧県(漢族) 兎と亀。最後の亀が兎の尾をかみ切る。⁷⁾

(e) 湖北省(漢族) 兎とスツポン。最後のスツポンが兎の尾をかみ切る。⁸⁾

(f) 江蘇省灌雲県(漢族) 兎と蟹。最後の蟹が兎の尾を挟み切る。⁹⁾

(g) 浙江省舟山市定海(漢族) 兎と亀。最後の亀が兎の尾をかみ切る。¹⁰⁾

(h) 広西壮族自治区寧明、上思等県(ヤオ族) 兎と鰐。最後の鰐が兎の尾をかみ切る。¹¹⁾

このうち黒竜江省に住むオロチヨン族の類話(a)

は、狐（イタチ）の物語となっており、連鎖譚の形式をとる話（b）もあるところから、これらは東北アジア類話群に包摂される。これに対して広西壮族自治区のヤオ族の類話（h）は、騙される動物が鰐になっており東南アジア類話群に含まれるものであろう。

一方、漢族の類話は「稲羽の素兎」と同様、すべて兎の物語になっている。兎の相手は蟹という一例（f）を除いて亀になっており、漢族では兎・亀の組み合わせが基本である。東北・東南アジア類話群を地理的につなぐ東アジア類話群の存在は、「稲羽の素兎」の位置づけを考える上にきわめて重要である。

近年東アジア類話群の一例として、韓国で重要な例が紹介された。それは『古今笑叢』に収載された作者未詳『奇聞』中の「狡兎脱禍」である。李朝後期にまでさかのぼるものだという。

兎が小熊たちに向かって母熊と関係があったという。これを知った母熊は兎を追いかけるが、葛に絡まって動けなくなる。兎は母熊を犯して嘲る。鶯が兎を攫う。母熊が兎にお前はどこへ行くのかというと、兎は上帝が自分を薬として使うと答えたので、腹を立てた鶯は兎を島に投げ落とす。島に落とされた兎はスツポンの一族を水面に並べさせ、数えるふりをして対岸に渡る。兎は猟師の罠にかかる。蚊を騙して自分の毛の一本一本に卵を産み付けさせる。体中に蛆が生じ、猟師は兎が腐ったと思い罠を解いて棄てる。¹²⁾

朝鮮半島における「稲羽の素兎」の類話としては、麗水市梧桐島に伝わる類話が知られていたが、それは『古事記』の影響を

否定できないものであった。しかしこの「狡兎脱禍」は李朝後期とはいえ比較的古い伝承であり、東アジア的な兎の物語でありながら、鳥に攫われるという東北アジア型に特徴的な挿話を含んだ連鎖譚を構成している。「稲羽の素兎」の比較研究上、最も注目すべき類話であることは疑えない。

「稲羽の素兎」型の物語の展開を巨視的に見ると、ユーラシア大陸東部沿岸の南北に分布し、その中間の日本に最古の事例がある。類話の勢力は東シベリアと東南アジア島嶼部には濃厚だが東アジアには薄く、最古の事例をもつ日本列島では消滅しているということになる。ここからこの物語の歴史の変遷をある程度推測することができる。

すなわちこの物語は、『古事記』の時代には日本を含む東アジアにそれなりに流布していたが、時代と共に流行の中心地が南北に分かれて遷移し、それまでの中心地であった東アジアでは衰退していった。その背後には、中国大陸において川面に並ぶ大きな水棲動物（例えば揚子江鰐など）が激減したという、動物相の変化があったのかもしれない。一方東南アジアでは鹿と鰐、東北アジアでは狐と海獣というように、それぞれの地域で特有の動物相に適合した形で物語が成熟し、流行することになったのであろう。

二 「蛇婿入り（芋環型）」

『古事記』崇神天皇の条に、次のような伝承が見える。陶都

耳命の娘、活玉依毘売のもとに何者かが通ってくる。やがて娘が身ごもったので、両親は糸を通した針をわたし、男の裾につけるようにいう。翌朝糸をたどって行くと、糸は三輪山に至り、三輪山の神が通ってきていたことを知った。有名な三輪の神婚伝承である。三輪山の神（大物主）が蛇神であることは知られているので、これは蛇神が人間の娘に通じた神婚譚である。

人間の娘が神と婚姻関係を結び神の子を生んだという神婚説話は、世界的に広く知られているものである。しかし神の正体を知るために「男の裾に糸を通した針を刺し、糸をたどって神の居場所を知る」という、いわゆる「苧環」のモチーフが結びついている物語はどこにもあるというものではない。

このような「苧環」モチーフを核とした神婚譚は、日本では『平家物語』に緒方三郎維義の遠祖の誕生譚として見え、現代の伝承としては琉球諸島の宮古島にも伝わっている。一方、昔話としては「苧環」モチーフを含む「蛇婿入り」が広く流布している。ただしここでは蛇は神ではなく、忌むべき妖怪になっている。

「苧環」モチーフを持った異類婚姻譚は、中国にも古くから知られている。『宣室志』（九世紀後半）には、平陽（山西）の伝承として、根切り虫が男に化けて娘に通う話がある。これと似た怪物の正体を「苧環」によって暴露し退治する物語は、南宋から清までの随筆筆記類に散見するが、退治される怪物は多様で、昆虫や植物、廟の神像や泥人、死人や石龜など多岐にわたっている。¹³

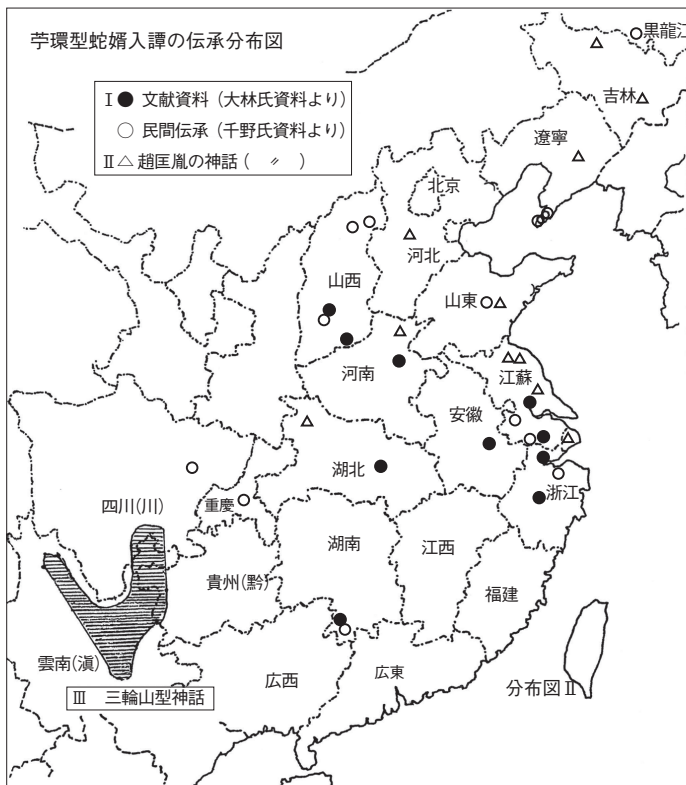
このような類話のなかに異類との婚姻によって有名な人物が生

まれたという伝承がある。宋の太祖の出生譚として知られるもので、娘に通う異類は獺やスッポンの精になっている。異類は「苧環」によって正体を看破されて殺されるが、後にその息子が風水を盗み取って王朝の始祖になる。¹⁴ 一見、日本の三輪山伝説と似ているが、これら中国の伝承はいずれも王朝の始祖に異類の血が流れているとし、王朝の始祖を貶める意識がはたらいっている。これをそのまま三輪の神伝の源流とみなすわけにはいかない。

一方、朝鮮半島にもこれと似た伝承がある。『三国遺事』（一三世紀）に見える後百濟朝（九〇〇～九三六）の始祖、甄萱の伝承がそれで、娘に通う男の正体は蚯蚓になっている。始祖を貶める意識は中国の伝承と同じである。また韓国には娘のところに通ってきた蛇に糸を付けた針を刺して退治したという、日本の「苧環型・蛇婿入り」のような昔話も広く伝わっている。

このように「苧環」モチーフは、東アジアでは古くから異類婚姻譚に結びつきながら広く展開していたものである。しかしこれを伝承心意の上から見ると、中国・韓国の類話は古典を含め、すべて邪悪な化け物を退治する話であって、『古事記』の三輪の神伝のような、蛇神との婚姻によって聖なる一族の誕生を説く神婚譚とは一線を画すものであった。

ところが「蛇（竜）神」の神婚譚と「苧環」モチーフが結びついた伝承は、日本を遙かに離れた中国大陸西南部、雲南省に居住する彝族とその近縁の民族に集中的に分布しており、分布論上の興味深い問題を示している。¹⁶ 以下にその分布図と、中国



西南少数民族に伝わる若干の類話をあげておこう。¹⁷⁾

(1) 彝族① (雲南省峨山彝族自治州)

瑪阿尼 (嫁に行かない女) という娘が妊娠する。母は娘に糸を通した針を男の体に刺させる。糸をたどると大竜潭にいた

(2) 納西族 (雲南省麗江納西族自治州)

酋長の娘に竜の子が通ってくる。娘の妊娠に気づいた酋長が娘に糸玉を渡し、それを若者の脚に結びつけるようにいう。糸をたどると、靈泉洞に入っており、相手が竜の子であったことを知る。やがて娘は多くの斑蛇や斑蛙を生む。酋長は東巴 (卜

る。娘は男児を生み、大竜潭に名前を付けてもらいに行くと、竜は石二海にせよと言い、自分は針の傷で七日しか生きられないという。やがて息子は嫁を探しに行くが、どこへ行っても気に入らず、母と結婚したいという。瑪阿尼は烏鷄黒犬の血を馬の頭に塗り、馬を息子もるとも池に沈める。瑪阿尼の死後、身体は山脈河流に変わった。¹⁸⁾

彝族② (貴州省盤県)

ある娘が身ごもる。天から男がやって来るといふ。父母は男に麻糸を付けておくよう娘にいう。糸をたどると河に消えている。男の正体は竜で、図らずも凡人に正体を看破せられ、河から出る事ができなくなったのだった。やがて娘の生んだ子は、竜天佑と名付けられ、幼少から文武に通じる。後に呉三桂の乱に際し、竜天佑は戦功があり、総兵の爵位を受け、世襲の土司となった。¹⁹⁾

ンパ)を呼んで祀り、これらの精霊を送り出した。これよりナシ族は立夏には家々で竈の灰を家の周囲に「竈の灰は火の神の唾、竜の子は娘のところへは来るな」と唱えて撒く。²⁰⁾

(3) 哈尼族(雲南省紅河哈尼族族自治州)

ある娘が一人の若者を愛して妊娠するが、若者の素性を知らない。兄嫁が糸玉を若者の身体に付け、行方を追うように教える。糸は河べりの岩穴へ続く。穴の中には金銀で飾られた部屋があり、大蛇がいる。大蛇は若者に変じると、娘の両親は化け物に食べられ、今の両親は化け物が化けていると教示する。(中略・化け物を退治する)化け物の死体は毒虫になる。娘と大蛇の間に生まれ、子供達は、化け物の変じた虫、病魔を祓う。化け物は大蛇と娘、その子供達を恐れるので、哈尼族はその子孫の蛇の子にならって顔に色を塗り、七月の蛇の日に病魔を祓う儀式を行う。²¹⁾

「苧環」モチーフそのものは東アジアでは普遍的なものだが、それが蛇(竜)神との婚姻譚と結びついた形ということになると、日本以外では中国西南部の彝語系諸族にしか伝わっていない。このような特異な分布は何を示しているのだろうか。これをその民族からの伝播だと見るのはあまりにも単純であろう。中国の伝承にもそれなりの変遷があったはずで、年代差を考慮に入れながら、分布と内容の変化を視野に入れた詳細な比較が必要になる。

日本では古層に神婚伝承があり、その上に怪物退治としての昔話(蛇髻入り)が広がっていた。大陸でも彝語系諸族の伝承は明らかに古層的な伝承である。恐らく苧環型の神婚伝承は本来的には東アジアに広く分布していたが、漢族のあいだでは早くに廃れて化け物退治となり、古い形が雲南少数民族と日本に残存したと見るべきであろう。では日本と彝語系諸族の間になぜ古層伝承が残ったのか。これらの地域では古くから蛇神に対する崇拜が盛んであり、蛇神を祖とする物語を維持する共通基盤が存在していた。古く漢代に雲南の滇国に授けられた金印が、倭奴国と同じ「蛇鈕」であったという事実もそれを示すものである。漢帝国にとつて、雲南の滇国と倭奴国は蛇を祀る国という認識があったのである。

このように「苧環」モチーフの分布論においては、「苧環」モチーフの分布だけに目を奪われるのではなく、それがどのような性質の伝承に結びついているのかという点が肝要である。蛇神崇拜を基盤とした神婚伝承と「苧環」のモチーフが結びついているところに、時空を超えて雲南少数民族と日本の三輪の神伝との比較が成立するのである。

三 ATU二一〇・英雄型と「黍団子」のモチーフの分布

複雑な構造をもった昔話を比較する場合にも、特定のモチーフの分布が重要な手がかりとなる場合がある。「黍団子」といえ

ば、桃太郎がお供を獲得する際の必須の要素として余りにも有名だが、東アジアにおける「黍団子」のモチーフ、つまり「次々と現れる援助者に食物を与え、お供につける」というモチーフの分布もまた、「桃太郎」の研究に重要な意味をもっている。ただこの問題を論じるためには、近年の「桃太郎」の本質をめぐる議論について簡単に述べておかなければならない。

大勢の仲間がそれぞれの特性によつて敵を退治するという物語がある。国際的にはA T U二一〇「雄鶏・雌鶏・アヒル・ピン・針などの旅行」として知られているもので、日本では「猿蟹合戦」の後半部分がこれに当たる。独立したタイプとしては「馬子の仇討ち」や「雀の仇討ち」などがある。類話は中国・朝鮮にも広く伝わっているが、ここでは虎に脅迫された老婆のところへ、様々な助っ人が次々とやって来て敵を待ち受けるという形になっている。中国や韓国では、むしろこのような弱い主人公に助っ人が次々と加勢するタイプが一般的である。

一方、日本の類話のように、敵討ちに向かう主人公の前に次々と助っ人が現れて戦闘隊を結成する「英雄型」は、日本・韓国・ホジエン族・チベット族・リス族・ヤオ族・ビルマ・ヴェトナムというように漢民族を取り囲むように分布している。²² このような漢民族を取り巻くような分布は、それが相対的に古い伝承であることを示すものである。ところで英雄が戦闘隊を結成するにあたり、ここに「異常誕生」と「黍団子」のモチーフが結びつけば「桃太郎」になる。

日本昔話の代表ともいうべき「桃太郎」の比較研究が進まなかったのは、これを「六人組の世界旅行」(A T U五一三A)と同系統の物語と見なしていたためである。しかし小島瓊禮はビルマと北米北西海岸原住民の類話との比較により、早くから「桃太郎」をA T U二一〇の変化であることを見抜いていた。²³ 近年の類話の集積は、小島説が正しいことを示している。

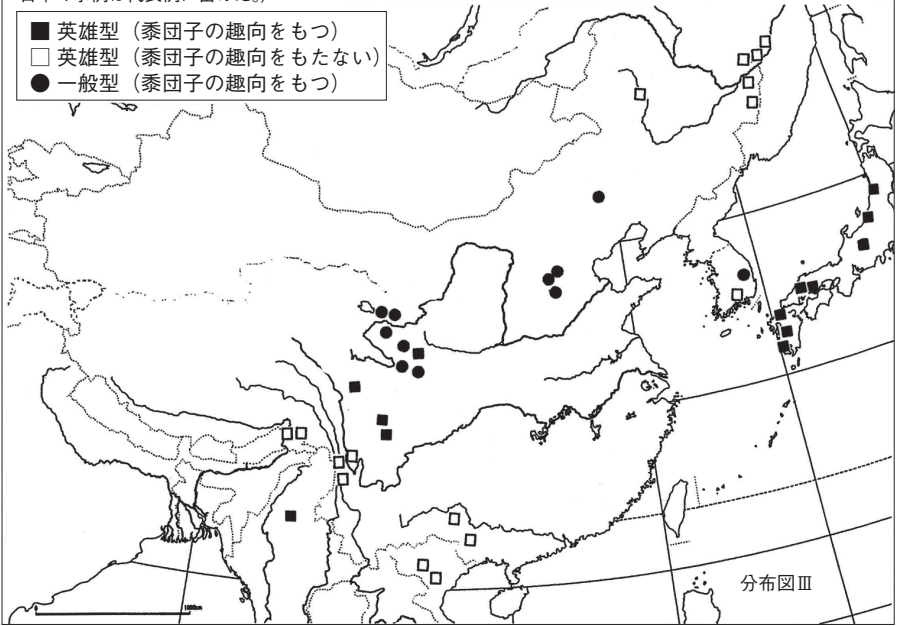
この仮説の傍証となるのが「黍団子」のモチーフである。いまA T U二一〇のうち「黍団子」のモチーフをもつ類話を見ると、チベット東部と日本にまとまった分布があり、それをつなぐ形で華北漢族・蒙古族・朝鮮に類話がある。日本の「馬子の仇討ち」や「雀の仇討ち」には「黍団子」のモチーフがあるが、「猿蟹合戦」にも「黍団子」を説くものがある。「黍団子」といえば「桃太郎」の印象が余りにも強いため、このような話は「桃太郎」との混交だといわれてきた。しかし「黍団子」のモチーフは本来的にA T U二一〇に強く結びついていたのである。²⁴

さらにこのうちチベット・ビルマ・日本には、敵討ちに向かう人間的な英雄譚に「黍団子」のモチーフが備わった話があり、またチベットには三種類の鳥獣をお供にする類話さえ伝わっている。「桃太郎」がこの系統に属することは動かないであろう。最後に英雄型のA T U二一〇と「黍団子」のモチーフの分布図といくつかの例話をあげておこう。²⁵

【東アジアにおけるATU210 英雄型と黍団子の趣向の分布】

(ミャンマー・ヴェトナム・ロシアの事例の伝承地は正確には不明であるため、大まかな分布を示す。日本の事例は代表例に留めた。)

- 英雄型 (黍団子の趣向をもつ)
- 英雄型 (黍団子の趣向をもたない)
- 一般型 (黍団子の趣向をもつ)



分布図Ⅲ

■ 英雄型 (黍団子のモチーフをもつ)

(a) ビルマ

女が太陽を罵ったため、親指ばかりの子が生まれる。子どもはやがて太陽と戦うために、お菓子を持って出かける。途中で小舟、竹いばら、苔、卵にお菓子をやってお供にする。人食い鬼の家に入って隠れ、帰ってきた鬼をそれぞれの方法で攻撃する。太陽と戦い、気候を回復させる。⁽²⁶⁾

(b) 四川省西部康定県瓦澤郷魚子村・蔵(チベット)族

息子がいなくなったので、母親が肉饅頭を持って探しに行く。カッコウがどこへ行くのだという。母親が息子を探しにとうとうと、肉饅頭をくれたら息子の居場所を教えてやろうという。母親は肉饅頭をやってカッコウをお伴にする。次に鷹、次いで兎が現れ同じことを言う。肉饅頭をやってお伴にする。息子は魔物によって箱に入れられている。兎が息子を救い出してカッコウと鷹に運ばせ、箱には石を詰めておく。帰ってきた魔物は兎といっしょに息子を食べようとする。兎に騙されたことを知った魔物は、兎を捕まえようとする。兎は逃げるが尻尾を掴まれ尻尾が切れる。兎の尻尾の短いのはこのためである。⁽²⁷⁾

● 一般型 (黍団子のモチーフをもつ)

内蒙古(モンゴル族)

鬼婆に狙われた娘たちが餅を灰の中に埋めて泣いていると、卵が転がってきてなぜ泣くのかという。事情を話すと、餅を一つくれたら加勢しようという。続いて石臼や鋏、針、豚の頭なども餅を貰って加勢する。²⁸⁾

まとめ

かつて神話や昔話の研究論文に、モチーフやタイプ別の国際的な分布図が示されることがあったが、近年はあまり見かけなくなつた。確かに分布図はあくまでも暫定的なものに過ぎず、そこからどのような情報を引き出すことができるかは、個々の事例によつてさまざまである。

しかし昔話のモチーフなりタイプ別の分布図を見る一つの興味は、その昔話を語り伝えた人間の活動を空間的に一望できるところで、そこからある種の感動を受けることさえある。物語がなぜこのような分布を示すのか。その問いが新たな視角や問題を生みだすきっかけにもなるのである。

近年のモチーフの分布研究においては、ユーリ・ベリョースキンの世界全域にわたる神話モチーフの分布地図の作成が、今後の分布研究の一つの方向を示すものとして注目に値する。人類文化としての昔話の研究においては、タイプ・モチーフの分布は、限定された地域のものではなく、やはり世界的に示されるべきであろう。ここから壮大な研究が広がっていくという予感がある。

ただ神話モチーフの分布を分子人類学のデータと組み合わせることによつて、出アフリカ以前に人類が持っていた神話モチーフを特定しようという見解²⁹⁾には疑問を感じざるを得ない。地球的に見て、同一のモチーフが隔絶した地域に見られるような場合、これを出アフリカ以前から人類が語り伝えてきた最古の物語と見ることは、確かに胸躍る想定ではある。しかしそもそも物語は考古学的遺物のように層位学と組み合わせて絶対的年代を割り出すことは不可能であり、また物語のモチーフがそれほどの持久性をもっているとも思えないからである。面白い物語の拡散は予想以上に速く、また複雑に変化を重ねながら動いていたのではないだろうか。

とはいえ人類が語り継いできた物語のタイプやモチーフを世界的に集成し、その分布を明らかにするという計画は壮挙というべきである。かつて地理学者の鈴木秀夫は、レイニーによるアフリカ大陸におけるイナゴの移動に関する研究について、「多くの研究は、単純な知識を空間的に拡大するという努力を避けてしまふ。その補償として対象の複雑な面をとらえて、細かい議論を行うようになる。それは専門家としては魅力のある議論になり、理論の精密さを誇るようにはなつても、も早や、人を感動させなくなつてしまつている」と述べた。³⁰⁾

口承文芸研究においてもまた、モチーフやタイプの地球的な広がりを展望することによつて、そこからまったく新しい視界が開けてくるに違いない。

注

第一集』一九八九年 一八三頁

(1) 小島瓔禮『古事記』の『稲羽の素菟』の位相、門田眞知子『編』『世界の神話から見た因幡の白兔』鳥取大学

(8) 『民間文学』一九五六年六月号 一八〇—一九頁

二〇〇五年 三五—三七頁

(9) 中国民間故事集成全国編輯委員会『編』『中国民間故事集成 江蘇卷』中国 ISBN 中心出版 一九九八年 五三—二頁

(2) 齋藤君子『M.ペリョースキンの神話モチーフ分布研究の問題点』、『なるう』六八号 二〇一四年二二頁

(10) 舟山市民間文学集成辦公室『編』『浙江省民間文学集成 舟山市故事卷』中国民間文艺出版社 一九八九年 五六—二頁

(3) 斧原孝守『中国の『因幡のシロウサギ』』、門田眞知子『編』『平成二十二年度鳥取大学地域貢献支援事業シンポジウム

(11) 凌永慶『編』『広西民間動物故事』広西人民出版社 一九七九年 九九—一〇一頁

白兔はどこからきたの シロウサギの世界 報告書』

(12) 魯成煥『韓国における『古事記』因幡の白兔型説話』、『日本思想文化研究』第五卷第二号 日本思想文化研究会

二〇一〇年 一〇頁。分布図は小島瓔禮『日本神話は南方文化をどんなかたちで表わしているか』(高崎正秀『編』

(13) 大林太良『中国の苧環型説話』、『大美和』第九四号 大神社社 一九九八年 二—八頁

『日本民俗学の視点3』日本書籍 一九七六年)に掲載された図に中国の類話を加えたものである。

(14) 斧原孝守『老頼稚伝説』考』、『比較民俗学会報』第十九卷第一・二・三・四合併号 比較民俗学会 一九九九年 二九—四一頁

(4) 中央民族学院漢語文学系民族文学編選組『編』『中国少数民族寓言故事選』甘肅人民出版社 一九八二年 三八六—三八七頁

(15) 千野明日香『三輪山神婚譚と中国の王朝始祖譚』、『口承文芸研究』第二三三号 日本口承文芸学会 二〇〇〇年 一五五—一六八頁

(5) 中国民間故事集成全国編輯委員会『編』『中国民間故事集成 黑竜江卷』中国 ISBN 中心出版 二〇〇五年 一一六—一六九頁

(16) 斧原孝守『雲南彝族の『三輪山型説話』』、『比較民俗学会報』第二四卷第四号 比較民俗学会 二〇〇三年、百田弥栄子『中国の苧環の糸 三輪山説話』、『説話・伝承の脱領域』説話・伝承学会 二〇〇八年、斧原孝守『中国西南少

(6) 中国民間故事集成全国編輯委員会『編』『中国民間故事集成 遼寧卷』中国 ISBN 中心出版 一九九四年 三七七—三七八頁

数民族地区民間文学集成編委會『編』一九八九年『堯都故事

(7) 臨汾地区民間文学集成編委會『編』一九八九年『堯都故事

(7) 臨汾地区民間文学集成編委會『編』一九八九年『堯都故事

堯都故事

- 数民族の『三輪山型説話』、『比較民俗学会報』第二八巻
 第四号 比較民俗学会 二〇〇八年、百田弥栄子「中国の
 三輪山神話 蛇婿入り譚と交叉して」『説話・伝承学』第
 一八号 説話・伝承学会 二〇一〇年
- (17) 百田、前掲論文(二〇一〇年 三三二頁)
- (18) 謝国先「竜種の命運…從《蛇入罾》與《瑪阿尼》的比較説
 起」『中日民俗文化國際研討會論文集』雲南大學出版社
 一九九九年 二六八頁
- (19) 盤県彝族研究会「編」『盤県彝族民間文學選』貴州民族出
 版社 二〇〇二年 一〜三頁
- (20) 木麗春「収集」『麗江名勝伝説』民族出版社 一九九六年
 一一〇〜一一二頁
- (21) 雲南省民間文學集成辦公室「編」『哈尼族神話伝説集成』
 中国民間文芸出版社 一九九〇年 四四六〜四五四頁
- (22) 斧原孝守「チベット族の昔話と『桃太郎』の源流」、『説
 話・伝承学』第十八号 説話伝承学会 二〇一〇年 二一
 〜三六頁
- (23) 小島瓊禮「昔話の变成」、成者説・崔仁鶴「編」『韓国・日
 本 説話研究』仁荷大學校出版部 一九八七年 三五四〜
 三六一頁、『比較民俗学会報』第三六巻第一号 二〇一五
 年 一〜二二頁
- (24) 斧原孝守「『猿蟹合戦』と『桃太郎』のあいだ」、外国民話
 の会「編」『聴く語る 創る 20 猿蟹合戦とブレイメンの音
 楽隊』日本民話の会 二〇一二年 二一〜三六頁
- (25) 斧原、前掲論文(二〇一〇年) 一六六頁
- (26) Hin Aung, Maung: Burmese Folk-Tales, 1948 pp.93-97
- (27) 西南師範學院中文系康定探風隊「編」『康定藏族民間故事
 集』人民文學出版社 一九五九年 八二〜八四頁
- (28) 鳥居きみ子「土俗学上より観たる蒙古」大鏡閣 一九二七
 年 一一〇七頁
- (29) 直野洋子「ユーリー・ベリョースキンの世界神話研究」、
 『口承文芸研究』第三四号 口承文芸学会 二〇一一年
 一四二頁
- (30) 鈴木秀夫「風土の構造」大明堂 一九八二年 七八頁
 (おのほら たかし/奈良県立奈良高等学校)